

私家版で送り出した本たち

馬場駿

還暦を前にどうしても本にしたかったのが完成までに十五年を要した『小説太田道灌』だった。道灌の調査を思い立ったのが母の亡くなった平成元年というのも上梓したい隠れた動機のような気がする。問題は発行費用であることは誰にでも分かる。普通なら「本を出そう」などという大それたことは考えまい。まず相場を知りたくなって当時の友人に総頁数、希望発行部数三百、原稿は手書きなど概要を伝えて首都圏の業者から自費出版の見積をとってもらった。出てきた額はなんと百八十万円、瞬時に諦めたのを憶えている。出せるわけがない。それでも何か手立てはないかと再び思案を始めたのが平成十五年、少しはパソコンにも慣れて同人誌原稿を書くのも編集をするのもワードを使っていた。自分で版下を作り印刷屋に印刷と製本だけを頼めないものか。計画だけは自分の中で成り、まづ入力を知り合いに頼んだ。仕事が激務という所為もあったが、なにより私が仮名打ちでその上「雨だれ」

と揶揄されるほど入力が遅かったからだ。アルファベット打ちでブラインドタッチな人は必須だった。とにかく気が急いた。「ベタ打ち」でいいと最初から負担は軽くしている。後には校閲が控えている以上、筆者が精読しなくてはならない。であれば打ち手に語句や文章のチェックは求めなくてもいい。そう考えたのだ。驚くなかれ、入力済み原稿がメール添付されてきたのは数日後だった。早い。時代物で二百五十三頁、文字数は十万四千もあるのだ。受け取った私の作業は半年間続いた。さすがに誤植は少なかったが、頁設定変更、ルビ振り、時代物特有の台詞や用語の校閲は手間取り、ノンブルを入れてようやく版下が整ったときは歓喜の声を上げた。画家である知人の表紙も出来たところで、また別の知人の紹介を得て県内の印刷所の見積をとった。校正は一切不要を前提にして三百部、ドキドキしながら待った金額は二十五万ほどだった。東京の見積の七分の一以下だった。これなら大事な生活費を使わずに発行できる。じつはこの一事、道灌後の三冊全ての自費出版についても通則にしている。発行原資には、個人の預貯金、短文応募の賞金、生命保険の満期保険

金、株式の投資利益などがあるが、生活費はない。

念願の一冊を上梓して落ち着いていた私だが、平成二十三年の東日本大震災を経て或ることで焦り始める。いつ来るか分からない死、年齢も六十五になる。未だほとんど何も残せていないという忸怩たる想いが、長編小説の発行という目標をつくり出した。初回の成功が頭にあつたのだ。『夢の海』の入力は自分でした。一回目で依頼した印刷所がすでに閉じていたので、前回の彼に再び紹介を仰ぎ、遠方だったが実際に会ってこちらの熱意を伝えた。表紙デザインは実姉の水彩画を得て自分でまとめていて、印刷所の担当員に了解をもらった。頁数二百五十、発行部数三百、もちろんソフトカバー本だが、発行経費は二十三万で済んだ。もちろん前回と同様、寄贈するための郵送料は別途かかり、こちらの経費は悔れない。

ホームページのインデックスでも書いたが、『孤往記』は、もちろん自費を使つての出版だが、いわゆる私家版ではないので経費の参考にはならないと思う。

毎回何らかの内向きの動機があつて上梓している私、平成二十九年の『キルリーの巣窟』は、観光ホテ

ル業に関する提言という意味付けと、人生最後の仕事場への感慨という側面があつた。どうしても硬くなりがちなテーマということで、執筆に際してかなり馴染みやすい挿話を組み入れた記憶がある。この回は『夢の海』と同じ印刷所に依頼できたので、ほとんど困りごととはなかつた。入力も表紙絵も印刷所も同じ、A五判、ソフトカバーも同様と交渉の流れも滞りなく、ただ部数が二百に減つた点が違いと言えは違いになる。

前出の費用が大雑把だったので、ここでは少し細かくお知らせして信憑性を高めたいと思う。二百六十七頁、十五万二千百十二文字で請求額十九万八千円、消費税額一万五千八百四十円だった。

最後に。自分で執筆、校正校閲、版下づくりをパソコンでする場合、どうしても回るリスクがある。誤字(変換ミス含む)、脱字を見逃してしまいやすいのだ。執筆者の頭は自分が正しいとして誤りをスキップする。校正者としての客観的で伶俐な目は期待できない。苦勞を重ねて上梓した本たち、しかしその結果だけを読者が見ているという辛い事実を噛み締めた自分がある。校正者という協力者は必須だ。